

住吉神社

棟 梁 柴田新平 真次 16～18 歳

再 建 明治 7 年 (1874 年)

所在地 七尾市田鶴浜町字二部 142 番地

宮 司 大森 道明

祭 神 表筒男命 中筒男命 底筒男命

迎貝土命



鳥居をくぐると左側に手水舎と神社由緒を書いた石碑がある。



境内を囲み、流れる用水は清く、石造玉垣に囲まれた町中にある神社である。

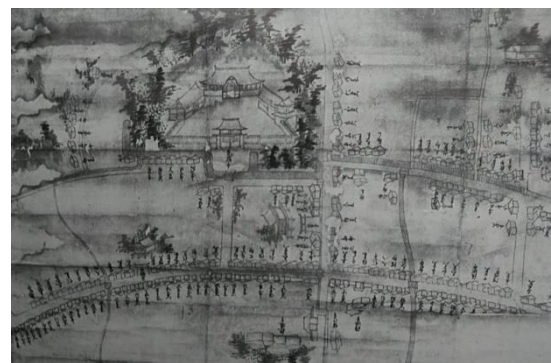


住吉神社の創祀年代は明らかでなく、1777～1181(治承中間)年ごろであろうと伝えられている。



春日鳥居を通して拝殿が望まれる。

氏子戸数は 600 戸を超え、境内には本殿 幣殿 拝殿 御輿蔵 手洗舎 鳥居、社標 駒犬 2 対 心灯村 石造玉垣がある。



もと登町の角地にあったが、1685 年(貞享 2)東町鎮座の市姫神社と相殿になり、のち 1824(文政 7) 3 月 24 日登町に社殿を建て奉斎された。しかし 1831 年(天保 2)より 4 度の大火ごとに礼殿が焼失したので、市姫神社との相殿をやめ 1851 年(嘉永 4)登り町の角地に移転されたのである。



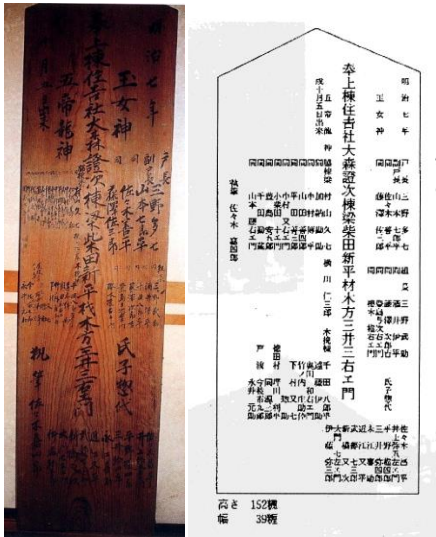
現在の拝殿は 1874(明治 7)年に棟梁柴田新平によって建てられた。



三間社の切妻造・妻入向拝の様式である。



向拝柱は角柱で向拝紅梁には柴田真次独特の卵型渦が足ら掘れ、木鼻にも彫刻があしらわれている。向拝桁を支える斗組(ますぐみ)も安定感があり、向拝屋根の重みを支えるには十分である。



棟札の棟梁は柴田新平となっているが、建造途中で亡くなられたので急遽、京都で柴田真助のもと修行中であった長男の真次が呼び寄せられ、棟梁の跡を継ぎ完成させと言われている。

田鶴浜の生んだ匠『柴田真次』16歳のことであった。



破風下の懸魚(げぎょう)はかぶら型の装飾が飾られ見事である。



正面の戸にも神紋である三蓋松が力強

く彫られている。真次の若い頃の彫刻の得意さを感じられる。

この後、84歳の生涯の中、多くの堂宇建築に係るのであるが、建築の中の装飾彫刻にも注目していきたいものである。



堂宇の縁を雨風から守る垂木(たるき)のかけ方にも注目したい。

桁からのびる地垂木、向拝桁までかかる打越垂木、さらには、屋根の反りの美しさをつくりあげる飛檐垂木(ひえんたるき)、それを支える隅木。美しい調和である。

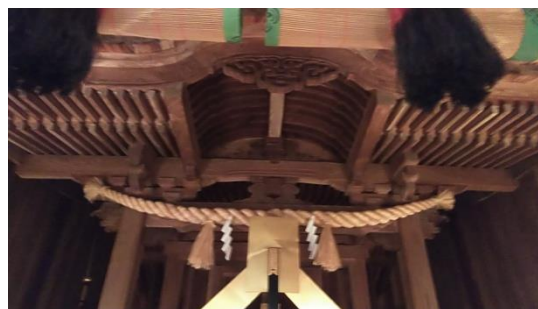


基壇から浜縁に上がる階段は丸の親柱で擬宝珠が施されている。架木(ほこぎ)は丸く、親柱とのバランスもよい。階段の段木は一枚板で造られ、厚みそのものが階段の高さとなっている。

向拝を支える礎盤石と杓石もしっかりしており、見事な調和である。



見学中に大森宮司さんに出会い神社内部も見せていただいた。ありがたいことである。内部は、拝殿、幣殿、本殿とつづいている。拝殿と幣殿が柴田真次の建立によるものと思われる。



何時、誰が建てられたかはわからないが、総檜造りの一間社である。切妻造りで唐風向拝があり、重厚さを感じさせられる。何時の日か詳細がわかればと思われる。



清き穴ヶ用水のせせらぎ、町びとのふるさとを思う玉垣。柴田真次の匠の力を受けとめている。近くには、真次20歳で建立の『荒石比古神社』や26歳での建立の『白山神社』、44歳での建立の『えびす堂』もある。足を延ばして見てみたいものである。

《ふるさと能登の匠 柴田真次》

柴田真次は、1857(安政4)年に堂大工新平の長男として生まれ、12歳で京都に出て現在の田鶴浜町吉田出身の堂大工柴田真助の弟子となって技術を修得しました。父新平の死去により一旦帰浜して父の建設中であった住吉神社を完成させたのが若干16歳でした。

22歳の時に現在の京都東本願寺の御影堂の左側手前を師匠柴田真助とともに受け持ったことから一躍全国にその名が知れ渡った人で、16歳で当神社拝殿を建て、田鶴浜においても多くの神社仏閣の建立に携わり、能登各地において堂宇の建立に係りました。さらには、横浜市鶴見の曹洞宗大本山総持寺紫雲台、門前総持寺祖院太祖堂同じく山門など寺社建築に大きな足跡を残して1940(昭15)年1月15日84歳で死去しました。

《ふるさとの生んだ能登の匠》です。